

身体的拘束を行わないための 当院としての取り組みについての提言

昔は身体拘束が当たり前の時代もありましたが、実際には車椅子ごと転倒したり、無理にはずそうとして怪我をして、いいことばかりではありませんでした。今は徘徊よりも、経管栄養や中心静脈栄養、点滴などを抜かないようにするための身体拘束が多くなっています。でも本当にその拘束が必要なのか、そもそもの延命治療を続けることが、本人にとっていいことなのかをきちんと考えないといけないと思います。

もし自分だったら、自分の親だったら、縛られて手袋をされて点滴をつながれたまま生きることを望むでしょうか。医療従事者として、病院の都合や延命のためだけではなく、患者様本人や御家族の気持ちを考える必要があります。現場では抜管や事故があって大変ですが、それでも本当に身体拘束が必要な医療なのか、拘束を行いながら続ける意味があるのか、御家族とも話し合いながら考えていくことが大切です。

最近は90歳以上の高齢の患者様も増えていて、中心静脈栄養や強い治療はしないで病院で自然に看取って欲しい、という家族も増えていきます。その期待に応えるには、医師が最後の点滴をやめる判断や、看取りに切り替える決断をしなければなりません。

終末期の病院として最期を全うするためには、簡単なことではないですが、可能な限り身体拘束を外し、患者様が最期を縛られたまま迎えることがないよう、人間らしく穏やかに最期を迎えられるようみんなで考えていきましょう。

令和8年6月19日

医療法人社団豊武会 幌東病院
院長 成松 信一